

# 「シュリーフェン計画」論争をめぐる問題点

石津 朋之

## はじめに

「シュリーフェン計画」をめぐる論争は、その策定時とされる 20 世紀初頭から今日にいたるまで活発に展開されている。その論点は、主としてこの計画の実現可能性や政治という枠組みの下での有用性をめぐるものが多かったが、近年、戦争計画としての「シュリーフェン計画」の存在そのものに疑問を呈する見解も発表されている。これが起こした「ツーパー論争」については後述するが、本稿では、今日までの先行研究を整理することにより「シュリーフェン計画」論争をめぐる問題点を素描する。繰り返すが、本稿は「シュリーフェン計画」そのものの問題点だけではなく、「シュリーフェン計画」論争をめぐる問題点を提示することをその目的としている。ここでは、主として政軍関係として知られる政治と軍事の在り方をめぐる問題、そして、戦略を決定する要因は何かをめぐる問題を中心に考察を進めたい。

## 1 ドイツを取り巻く国際環境

「シュリーフェン計画」について検討する前に、「ドイツ統一戦争」から第一次世界大戦にいたるまでの期間のドイツを取り巻く国際環境を概観しておこう。

ドイツの戦争計画策定者は、フリードリヒ大王の時代から一つの根本的な戦略問題を抱えていた。それは、敵対的なフランスに西側から、そしてやはり敵対的なロシアに東側から（さらには通常、南側からやはり敵対的なオーストリアに）挟まれており、ドイツが戦争での敗北を回避できる唯一の方策は、一方の敵が介入してくる前にもう一方の敵を撃滅することだけであった。「ドイツ統一戦争」でのプロシアの勝利は、そこでロシアを中立に留めることに成功したビスマルクの功績に負うところが大きかったが、1890 年代初頭には仏露同盟が復活したため、ドイツの抱える戦略問題はより明確なかたちで現れてくるのである<sup>1</sup>。

仮に戦争が生じた場合、東部戦線で決定的な勝利を得ることは不可能である。東部戦

---

<sup>1</sup> Michael Howard, *The First World War* (Oxford: Oxford University Press, 2002), p. 28.

線での対ロシア戦争では、広大な平原を用いてロシア軍が戦闘を回避する可能性が高く、それは結局、長期間の戦いを意味することになる。そして、ヨーロッパ大陸での大国間の戦争はイギリスの介入を不可避にすると予想されたため、同国の介入を阻止するためにも短期の戦争が必要とされたのである。仮に西部戦線でフランスを敗北させることができれば、ロシアと直ちに講和条約を結べる可能性は存在する。問題は、いかにしてフランスに対する迅速かつ決定的な勝利を得るかである。普仏戦争以降フランスは、対ドイツ国境地帯に強固な要塞網を構築しており、この戦争での勝利を再現することは明らかに不可能であった。唯一の方法は中立国ベルギーを経由しての迂回作戦にあるように思われた。そしてこの迂回作戦とは、迅速にフランス陸軍を敗北させ、その後、予想されるロシア軍の攻勢を阻止するため東部戦線に兵力を移送できるほどの強力なものである必要があった<sup>2</sup>。

こうして、ベルギーを経由して大規模な進攻作戦を行うことはドイツの戦争計画にとつて不可欠な要素になっていった。そして幸運にも 1912 年から 13 年にかけての陸軍改革により、ドイツ陸軍の規模が増大した結果、こうした作戦を実施することが現実的になってきたのである<sup>3</sup>。端的に言って、攻勢主義に対する絶対的信奉こそ、第一次世界大戦前のドイツの戦争計画を支えていた要石であった<sup>4</sup>。

実際、第一次世界大戦におけるすべての参戦諸国の戦争計画は、仮に戦争を破滅的なものにしなないためにはこれを短期間で終結させる必要があり、短期間で戦争を終結させる唯一の方法は攻勢を成功させることであるとの前提に基いていた。そしてこの前提は、当然、ドイツにおいてもっとも強く信じられていた。こうして「シュリーフェン計画」の基本構想が固まってきたが、既に述べたようにこの計画は、フランス陸軍を敗北させるだけでは意味がなく、これを「明日のない戦闘 (Schlacht ohne Morgen)」で包囲かつ殲滅させる目的のものであった<sup>5</sup>。

---

<sup>2</sup> Howard, *The First World War*, p. 28.

<sup>3</sup> Howard, *The First World War*, p. 28.

<sup>4</sup> 第一次世界大戦前のヨーロッパ主要諸国の戦争計画については、石津朋之「戦略を考える三つの視点——第一次世界大戦前夜の事例を中心に」『国際安全保障』(第三三巻第二号、2005年9月)、Paul M. Kennedy, ed., *The War Plan of the Great Powers* (London: Unwin Hyman, 1979); *idem*, ed., *Grand Strategies in War and Peace* (New Haven: Yale University Press, 1991); Hew Strachan, ed., *The Oxford Illustrated History of the First World War* (Oxford: Oxford University Press, 1998); *idem*, *The First World War, Volume I: To Arms* (Oxford: Oxford University Press, 2001); Douglas Porch, *The March to the Marne: The French Army 1871-1914* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981) などを参照。

<sup>5</sup> Howard, *The First World War*, p. 35. 「シュリーフェン計画」の概要については、Stig Forster, *Der Doppelte Militarismus. Die Deutsche Heeresrüstungspolitik zwischen Status-Quo-Sicherung und Aggression, 1890-1913* (Stuttgart, 1985); *idem*, "Der deutsche Generalstab und die Illusion des kurzen Krieges, 1871-1914. Metakritik eines Mythos," *Militargeschichtliche*

ドイツ陸軍参謀総長を 1891 年から 1905 年の間（正確には 1906 年 1 月 1 日まで）務めたアルフレート・フォン・シュリーフェンは、当時、ヨーロッパ大陸での次なる大規模な戦争がヨーロッパの自殺行為になることを十分に理解していた。だが彼は、自身の任務がこうした環境の下で勝利を得るための方法を考えることであり、それができないことを認めることではないと考えた。そこでシュリーフェンは、鉄道の発展によってもたらされた戦略的機会にその答えを見出そうとしたのである<sup>6</sup>。同時にシュリーフェンは、100 万規模の軍隊の維持に巨額の費用が必要とされる時代においては、長期間の消耗戦争は不可能であるとも述べている<sup>7</sup>。戦争は短期間で終結しなければならなかったのである。

「ドイツ統一戦争」での勝利の後、当時のドイツ陸軍参謀総長ヘルムート・フォン・モルトケ（以下、大モルトケ）が構想した将来の戦争計画の基本は、東部戦線での大規模な攻勢と西部戦線における攻勢防御であった。あくまでも重点は東部戦線に置かれていた。大モルトケは将来、二正面戦争で完全な勝利を得ること、すなわち二つの敵を交互に完全に撃滅することは不可能であると考えていた。そこで彼は、西部戦線では攻勢の可能性を残しながらも、あくまでも防勢を基本としたのである<sup>8</sup>。大モルトケの後継者であるアルフレート・フォン・ヴァルデーゼーもまた、西部戦線で防勢を維持することについては一貫していた。そうしてみると、シュリーフェンこそドイツ軍の戦争計画を根本的に変更した人物であったとする従来からの解釈にも相当の説得力がある<sup>9</sup>。確かにシュリーフェンは、

---

*Mitteilungen* 54 (1995), pp. 61-95; Robert T. Foley, translated and edited, *Alfred von Schlieffen's Military Writings* (London: Frank Cass, 2003); Robert T. Foley, *German Strategy and the Path to Verdun: Erich von Falkenhayn and the Development of Attrition, 1870-1916* (Cambridge: Cambridge University Press, 2005) などを参照。

<sup>6</sup> シュリーフェンは、自国の鉄道の戦争への運用を熱心に検討する反面、敵国がそれを利用する可能性についてはあまり考えが及ばなかったようである。とりわけ、フランス軍が戦争に鉄道を利用する可能性である。実際、第一次世界大戦においては、基本的にドイツ軍が「円の周囲」を徒歩で進攻する必要があったのに対して、フランス軍は、「円の弦」を鉄道で横切って軍隊を移送することができた。これは、「シュリーフェン計画」の成否が主として時間という要素に依存していただけに決定的であった。さらには、橋梁などへの敵の破壊工作によりドイツ軍の進攻が妨害される可能性は十分に予想されたため（第一次世界大戦では現実にそうなった）、この問題はより致命的となる。当然ながら、現実にドイツ軍の食糧及び弾薬の補給は、ベルギーやフランス北部を通る鉄道や橋梁を再建するまで制限されることになった。

<sup>7</sup> この点について詳しくは、シュリーフェンの 1909 年の論考「今日の戦争」及び 1911 年の論考「100 万規模の軍隊」を参照。Foley, translated and edited, *Alfred von Schlieffen's Military Writings*, pp. 194-207.

<sup>8</sup> 大モルトケの戦争計画については、Arden Bucholz, *Moltke and the German Wars, 1864-1871* (Hampshire: Palgrave, 2001) を参照。

<sup>9</sup> 日露戦争とその後の革命騒動によるロシアの弱体化、さらには、ドイツとフランスの関係を一挙に緊張させたモロッコ危機の影響がシュリーフェンが戦争計画を変更した要因であると、多くの歴史家は解釈している。確かに、既に 1892 年の覚書でも示されていたシュリーフェンの西部戦線での戦争計画は、明らかにそれまでの方針とは異なったものであった。

既に 1890 年代初頭には東部戦線の低湿地帯では迅速かつ決定的な勝利が不可能であると認識し始めており、この認識は、その後のシュリーフェンの思想のなかで一貫しているように思われる。

ここで、これまでの通史に従って「シュリーフェン計画」の概要を記せば、シュリーフェンは、多少の絶望感を抱きながらも一つの戦争計画を立案したとされる。その計画の本質は、運用可能な軍事力の 8 分の 7 を西部戦線での攻勢に集中し、さらには、その主力をルクセンブルグとアーヘンの間の地域に集中して、フランスを目標にベルギーとオランダに進攻するというものである。その際、ドイツ軍は可能な限り英仏海峡に接近して機動することによりフランス軍左翼を突破または包囲し、その後、セヌ河を渡河して巨大な「回転ドア」(リデルハート)のような運動を行なうことによりパリ南西地域を通過するというものである。一方、軍事力の手薄な南部地域では、ドイツはムーズ河の線で待機し、自軍右翼の進攻により東側に退却すると予想されたフランス軍を撃滅することが期待された。シュリーフェンは、この計画の実施には約 6 週間が必要とされると見積もっていた。

## 2 「シュリーフェン計画」とは何か

「シュリーフェン計画」をめぐる論争を複雑にしている一つの要因として、これが、歴史用語であると同時に政治用語として用いられているため、その意味するところが多義的かつ曖昧である点が挙げられる。加えて、歴史用語としての「シュリーフェン計画」でさえ、その定義が統一されていないのが現状である。例えば、狭義の意味での「シュリーフェン計画」とは、1905 年末にシュリーフェンが記したとされる「覚書 (Denkschrift)」を指す<sup>10</sup>。これが、一般にシュリーフェンの戦略思想の集大成と理解されている文書であり、この「覚書」だけを指して「シュリーフェン計画」と呼ぶこともあれば、この「覚書」を作成するために準備された「予備草案」や 1906 年初頭の「追加覚書」などの各種の文書を含める場合もある。また、この言葉を広く解釈してシュリーフェンの陸軍参謀総長時代はいうまでもなく、その後、第一次世界大戦にいたるまでのドイツ軍による一連の対フラ

---

<sup>10</sup> アメリカで発見されたいわゆるシュリーフェン関連文書として知られる一連の史資料は、これが断片的にしか残っていないことに加えて、誰が作成したものかさえ特定できないものも多い。また、これらの史資料が必ずしも時系列的に整理されていないため、その史料価値が判断できないという問題もある。通常、狭義の「シュリーフェン計画」として知られる「覚書」とは、1905 年 12 月にシュリーフェンが彼の後継者に対する指示として残した文書であり、後継者には 1906 年 1 月の「追加覚書」とともに 2 月に手渡された。「追加覚書」と明確に区別するため、「大きな覚書」と表記されることもある。なお、この 1905 年の「覚書」は、「予備草案」、「清書された計画書」、「修正草稿」などを基礎にして作成されたものである。

ンス戦争計画の総称として用いられる場合も多い。さらには、1914年夏、第一次世界大戦の緒戦で実際にヘルムート・フォン・モルトケ（小モルトケ）が用いた戦争計画を含める場合すらある<sup>11</sup>。本稿では、基本的に「シュリーフェン計画」とは狭義の「覚書」を意味するものとするが、議論の必要に応じてその定義を拡大する場合もある。

次に、以下、「シュリーフェン計画」に関するこれまでの研究史を簡単に整理してみよう。第一次世界大戦直後、「シュリーフェン計画」に対する評価に圧倒的ともいえる影響を及ぼしたのがヴォルフガング・フェルスター（Wolfgang Foerster）、ハーマン・フォン・クール（Hermann von Kuhl）、そして、ヴィルヘルム・グレーナー（Wilhelm Groener）の著作である。同大戦をめぐるドイツ公刊戦史第一巻と同様に、これらの著作は「覚書」こそがシュリーフェンの戦略思想の集大成であると捉え、この壮大な計画をその後、小モルトケが改悪した、あるいは水に薄めたと批判するものであった<sup>12</sup>。端的に言えば、こうした著

<sup>11</sup> だが、近年では小モルトケの戦争計画を「シュリーフェン計画」とはまったく別のものと捉える見解が主流になりつつある。この新たな戦争計画は、明らかに「シュリーフェン計画」の原型の主要な要素を取り込んだものであったが、小モルトケ自身による計画であり、結果としては「シュリーフェン計画」の単なる修正ではなくなっていた。詳しくは、Annika Mombauer, *Helmuth von Moltke and the Origins of the First World War* (Cambridge: Cambridge University Press, 2001) を参照。

<sup>12</sup> 例えば、Wolfgang Foerster, *Graf Schlieffen und der Weltkrieg* (Berlin, 1921); *idem*, *Aus der Gedankenwerkstatt des deutschen Generalstabes* (Berlin, 1931); Herman von Kuhl, *Der deutsche Generalstab in Vorbereitung und Durchführung des Weltkrieges* (Berlin, 1920); *idem*, *Der Marnefeldzug 1914* (Berlin, 1921); Wilhelm Groener, *Das Testament des Grafen Schlieffen* (Berlin, 1921); *idem*, *Das Feldherr wider Willen* (Berlin, 1931) などを参照。ただし、後述するようにグレーナーは、必ずしも「シュリーフェン計画」に全面的に賛成していたわけではない。なお、小モルトケが「シュリーフェン計画」を改悪したとする批判の論拠としては、通常、次のような要素が挙げられる。西部戦線のドイツ軍の右翼と左翼の兵力比を7対1から3対1に変えたこと、第一次世界大戦勃発後、東プロイセンに進攻したロシア軍に対抗するためベルギー方面の右翼から2個軍団と騎兵1個師団を8月25日に移動させたこと、アントワープ方面に退却したベルギー軍に対して1個軍団、モーブージュ要塞の包囲のために1個軍団をそれぞれ右翼から移動させたこと、ベルギー国境突破後、ブリュッセルからルクセンブルグ南端を結ぶ線で右翼軍の早期の統一を図ったため、旋回運動に支障が生じたこと、ドイツ第六軍及び第七軍正面の南方地域に進攻したフランス軍に対して、第六軍の過早な反撃を許可したため、右翼の強化に用いるべき部隊の撤退を不可能にしたこと、フランス軍の反撃を恐れて第一軍の進攻方向をパリ東方に変更し、また、総司令部と前線部隊の連絡に、電信や電話ではなくF・H・R・ヘンチュに代表される個人に依存しすぎたこと、参謀総長として小モルトケには戦争指導における確固たる信念がなく、前線部隊の指揮官に最終的な指導を行うことなく常に曖昧かつ不確実な方法を用いたこと、などである。

だが、今日から振り返れば、全体として第一次世界大戦前の小モルトケとルーゼンドルフによる戦争計画の変更、とりわけ北方の包囲運動を小規模なものに留め、ドイツ国境付近の二重挟撃作戦でフランス軍を包囲するという計画は、「シュリーフェン計画」より成功の可能性が高かったように思われる。例えば、シュリーフェンとは対照的に小モルトケは兵站面の準備にかなりの力を注いだため、今日では、これが1914年のマルヌ河への進攻を可能にした一因であったと認められている。こうした点について詳しくは、ガンサー・E・ローゼンバーク「モルトケ、シュリーフェンと戦略的包囲の原則」ピーター・パレット編、防衛大学校「戦争・戦略の変遷」研究会訳『現代戦略思想の系譜—マキャヴェリから核時代まで』ダイヤモンド社、1989年 (Peter Paret, ed., *Makers of Modern Strategy from Machiavelli to the Nuclear Age* [Princeton: Princeton University Press, 1986])、

作はいずれもいわゆるシュリーフェン擁護論、そして小モルトケ批判論を展開したのである<sup>13</sup>。ここに、「シュリーフェン計画」をめぐる第一の「神話」が誕生することになる。残念ながらこの時期、ドイツ国内における公文書の開示・閲覧は大きく制限されており、シ

---

287 頁を参照。

なお、ゲルハルト・リッターの著『シュリーフェン・プラン』には、「シュリーフェン計画」に対する小モルトケの見解が紹介されている。この 1911 年作成と思われる文書『「シュリーフェン計画」に対する全般的考察』には以下のような記述がみられるが、そこでは、ドイツが包囲作戦を実施するにあたり、ベルギーだけでなくオランダの中立をも侵犯することについて小モルトケが消極的であった事実が伺われる。「我々の背後に備えた敵意をもったオランダは、ドイツが西方へ進攻する際、不吉な結果を生むであろう。とりわけイギリスが、ベルギーの中立侵犯を理由にドイツの敵側に組み込まれて参戦する場合、このような結果を生むかも知れない。オランダが中立に留まるのであれば、ドイツの背後は安全である。というのは、イギリスはドイツによるベルギーの中立侵犯を理由に参戦する以上、オランダの中立を自ら侵犯することはできないからである。イギリスは、ドイツに対して宣戦布告したその国際法違反を、自ら行なうわけにはいかないのである。」詳しくは、ゲルハルト・リッター著、新庄宗雅訳『シュリーフェン・プラン——ある神話の批判』新庄宗雅出版、1988 年 (Gerhard Ritter, *Der Schlieffenplan. Kritik eines Mythos* [München, 1956])、220～221 頁を参照。なお、訳語は一部訂正した。以下も同様。

前述のように第一次世界大戦後、小モルトケは「シュリーフェン計画」に反してパリを通過する前に自軍を内側に回転させることによって、フランス軍の迅速な反撃に側面を暴露したと批判された。しかしながら、一連のシュリーフェン関連文書から明らかなのは、シュリーフェン自身もドイツ軍の兵力がこうした極めて広範囲の延伸には不十分であると認めていた事実、そして、シュリーフェンも小モルトケと同様、パリの北で内側に回転することを検討していた事実である。小モルトケに対するもう一つの批判に、彼が新たに編制された兵力を西部戦線の右翼でなく左翼に配置したことにより、戦争計画そのものを無意味にしたというものがあるが、この点についてもシュリーフェンは、左翼を強化する必要性を認識していたのである。よく考えてみれば、仮に兵力を増強できたとしても、食糧や弾薬を補給することが不可能であれば意味がない。そうしてみると、ドイツの戦争計画における小モルトケの「勇気の不足」(リデルハート)がその後の消耗戦争を招いたとの批判は、論拠に乏しいといわざるを得ないのである。

さらには、シュリーフェンの参謀総長離任は 1905 年のことであり、これは第一次世界大戦勃発の約 10 年前である。これほど前に離任した前任者の構想を、なぜ後任の小モルトケが忠実に実施する必要があるのだろうか。当然ながら、この期間には国際政治、国内政治、経済、そして技術といったあらゆる領域でドイツを取り巻く環境は大きく変化していたのである。

そうしてみると、「シュリーフェン計画」が一人の天才の所産であり、勝利のための完全無欠な処方箋であったにもかかわらず、不幸にもこれが小モルトケという不適格な後継者の手にわたったため失敗したとする一般的認識には、まったく根拠がない。また、「シュリーフェン計画」を実施するには、過度なまでに中央集権的な戦争指導が必要とされた。しかしながら、1914 年にこのような中央集権的な戦争指導が効果的に行われなかった事実を、はたして小モルトケの個人的資質に帰することができるだろうか。答えは否である。

<sup>13</sup> リッターの『シュリーフェン・プラン』の英語版には、B・H・リデルハートが序言を寄せているが、そこにも、第一次世界大戦後のドイツ軍人がシュリーフェンを憧れに近い畏敬の念をもってドイツの最高の戦略家として語り、1914 年の西部戦線での攻勢が失敗した原因を、シュリーフェンが参謀総長在任中に苦心して作成した計画を彼の後継者である小モルトケが修正し、間違っただけで実施したことに戻っていた事実が明確に記されている。詳しくは、B・H・リデルハート「英訳版『シュリーフェン・プラン』への序言」リッター『シュリーフェン・プラン』を参照。なお、訳語は一部訂正した。以下も同様。

ユリーフェンの「覚書」が一般に公開されることはなかった<sup>14</sup>。

いうまでもなく、シュリーフェンの構想に対する批判は当初からドイツ軍指導者層に存在した。その代表的人物が、ジギスムント・フォン・シュリヒティンクであり、フリードリヒ・フォン・ベルンハルディであった。とりわけベルンハルディは、「マヌーバー・アプリアオリ」と表現されるシュリーフェンの戦争計画に反対の立場を表明したことで知られている。彼は、このような非人格的かつ機械的な戦争計画は、戦争のアートを一般の職業の技術と同一のものとし、戦略家を単なる技術者に貶めてしまうことになる」と批判した<sup>15</sup>。

「戦争のアートの破産宣告」として知られる批判である。また彼は、シュリーフェンが兵力数を過度に強調することにも疑問を呈し、指揮能力や部隊の資質なども同様に評価すべきであると主張している。さらにベルンハルディは、包囲だけに依存するのではなく、戦術レベルに留まらず戦争計画全体のなかで突破が使用されるのであれば、これが可能かつ有用であると述べている。同様に、カール・フォン・ビューローやコルマル・フォン・デア・ゴルツもシュリーフェンの計画には批判的であった<sup>16</sup>。

<sup>14</sup> ホルガー・ハーウィックはその論考のなかで、第一次世界大戦後、この戦争の責任がドイツにあるという主張を否定するために、ドイツ政府がどのようなキャンペーンを展開したかについて詳細に検証している。それによれば、例えばワイマール共和国は公文書を選択的に出版し、1914年のドイツの役割について研究者が知ることを阻止するため公文書へのアクセスを制限したのである。また、同大戦後、ドイツ外務省は宣伝目的に多額の資金を提供、議会による調査を妨害し、大学教授の任命にすら介入したのである。この「ディスインフォメーション・キャンペーン」はその多くが成功し、第一次世界大戦が不可避な戦いであったという認識を一般に浸透させ、ドイツ国内はもとより国外においても今日にいたるまで、同大戦の起源をめぐる人々の理解を歪曲しているのである。詳しくは、Holger H. Herwig, “Clio Deceived: Patriotic Self-Censorship in Germany After the Great War,” in Steven E. Miller, Sean M. Lynn-Jones, Stephen Van Evera, eds., *Military Strategy and the Origins of the First World War* (Princeton: Princeton University Press, 1991) を参照。

<sup>15</sup> なお、ベルンハルディの「シュリーフェン計画」批判については、Jehuda L. Wallach, *Das Dogma der Vernichtungsschlacht. Die Lehren von Clausewitz und Schlieffen und ihre Wirkungen in zwei Weltkriegen* (Frankfurt/M., 1967) を参照。

<sup>16</sup> こうした点については、ローゼンバーク「モルトケ、シュリーフェンと戦略的包囲の原則」パレット編『現代戦略思想の系譜』280頁を参照。また、ローゼンバークが言及していない重要な人物の一人として、ヘルマン・フォン・ボイエンの名前が挙げられる。ボイエンは、広範囲にわたる鉄道の使用は動員計画を危険なまでに硬直化し、機械的にしてしまう可能性を早くから認識していた。詳しくは、Friedrich Meinecke, *Das Leben des Generalfeldmarschalls Hermann von Boyen*, 2 vols. (Stuttgart, 1895-99), vol. 2, pp. 530-4 を参照。さらには、「シュリーフェン計画」の補給や輸送の問題については、既に1906年には当時の参謀本部鉄道局長であるヴィルヘルム・グレーナーが疑問視していた。グレーナーの結論は、「シュリーフェン計画」には成功の可能性がないというものであった。彼によれば、恐らく進攻があまりにも急速なため、食糧補給部隊がベルギーからフランスにいたるまでの大規模な軍隊を維持することは不可能であった。したがって、すべては鉄道の正常な運行に依存することになり、仮に鉄道が完全に破壊されれば大きな問題が生じるであろうと、あたかも第一次世界大戦の緒戦の様相を正確に予測していたかのような指摘をしていたのである。この点について詳しくは、マーチン・ヴァン・クレヴェルト著、佐藤佐三郎訳『補給戦——ナポレオンからパットン将軍まで』原書房、1980年、113頁を参照。しかしながら、戦後のシュリーフェン信奉者には、こうした見解はすべて都合よく忘れ去られていたのである。

第一次世界大戦後も「シュリーフェン計画」に対する批判は続いた。そのなかでもっとも著名な人物が歴史家ハンス・デルブリュックであるが、ドイツ軍内のいわゆる「西部戦線派」に対する戦中・戦後を通じたデルブリュックの批判は、間接的ながら「シュリーフェン計画」に対する批判に繋がったのである<sup>17</sup>。また、多くの点でデルブリュックと対立したエーリヒ・ルーデンドルフも、小モルトケに同情的な見解を述べている<sup>18</sup>。だが、こうしたデルブリュックやルーデンドルフの見解が一般に受け入れられることはなかった。

戦間期のドイツで作り上げられたこのような第一の「神話」を破壊したのが、ゲルハルト・リッターであった。第二次世界大戦後、1956年のことである<sup>19</sup>。同年に出版されたリッターの『シュリーフェン・プラン——ある神話の批判』は、シュリーフェン関連文書のなかの「覚書」などを論拠に、はたして「シュリーフェン計画」が実行可能な戦争計画であったかという根本的問題を読者に突き付けたことで知られている。彼の「シュリーフェン計画」批判を一言で要約すれば、これが、柔軟性に欠け、あまりにも危険すぎ、純粹に軍事的な観点から立案された計画であるというものである<sup>20</sup>。

---

<sup>17</sup> 例えば、Hans Delbrück, *Krieg und Politik III Teil 1918* (Berlin, 1918); *idem*, “Die deutsche Kriegserklärung und der Einmarsch in Belgien,” *Preussische Jahrbücher* CLXXV 175 (Jan.-Mar., 1919), pp. 271-80 を参照。なお、デルブリュックについては、Sven Lange, *Hans Delbrück und der “Strategiestreit”. Kriegführung und Kriegsgeschichte in der Kontroverse 1879-1914* (Freiburg i. B., 1995); Azar Gat, *The Development of Military Thought: The Nineteenth Century* (Oxford: Clarendon Press, 1992); Hans Delbrück, edited and translated by Arden Bucholz, *Delbrück’s Modern Military History* (Nebraska: University of Nebraska Press, 1997), pp.180-192; Arden Bucholz, *Hans Delbrück and the German Military Establishment: War Images in Conflict* (Iowa: University of Iowa Press, 1985); *idem*, “Hans Delbrück and Modern Military History,” *The Historian*, 55 (Spring 1993)を参照。また、日本語の文献としては、石津朋之「政治と戦争」道下徳成、石津朋之、長尾雄一郎、加藤朗『現代戦略論——戦争は政治の手段か』勁草書房、2000年を参照。しかしながら、1918年以降にシュリーフェンに批判的な論者が展開した勝利のためには攻勢を西部戦線から東部戦線に変更すべきであったという単純な議論は、実際にはそれほど大きな成功の可能性を有しておらず、逆に、ドイツの西部戦線を決定的なまでに弱体化させたであろうと推測される。かつてA・J・P・テイラーは、第一次世界大戦での西部戦線以外の地域の戦いを「余興」とさえ呼んだが、これは決して結果論ではない。それほどまでに、この戦争において西部戦線は決定的な役割を担っていたのである。

<sup>18</sup> 例えば、Erich Ludendorff, *Kriegführung und Politik* (Berlin, 1922); *idem*, “Der Aufmarsch 1914,” *Deutsche Wehr* (04, Jan., 1930), pp. 3-4 を参照。ルーデンドルフは第一次世界大戦前夜のドイツの戦争計画を立案した中心的存在であり、当時の内部事情にもっとも通じていた。なお、ルーデンドルフについては、石津朋之「総力戦、モダニズム、日米最終戦争——石原莞爾の戦争観と国家・軍事戦略思想」石津朋之、ウィリアムソン・マーレー共編著『日米戦略思想史——日米関係の新しい視点』彩流社、2005年を参照。

<sup>19</sup> リッターは1953年、アメリカを訪問した際、ワシントンの国立公文書館でシュリーフェン関連文書を発見したのである。実は、シュリーフェンの女婿によって寄託され、ポツダムドイツ公文書館に保管されていたこれらの文書は、第二次世界大戦終結直後、その他の膨大な軍事関連文書とともに戦勝国であるアメリカに運び去られていたのである。

<sup>20</sup> リッター『シュリーフェン・プラン』99-170頁。こうした視点からすれば、フェルスター、クール、そしてグレーナーに代表されるシュリーフェン個人と「シュリーフェン計画」を擁護する論者

興味深いことにその後、冷戦が終結するまでの期間、「シュリーフェン計画」について論じた著作の大多数は、基本的にこのリッターによる批判、さらには、シュリーフェンがドイツ軍右翼をパリ南西にまで回転させ、大規模な殲滅戦争、すなわちカンネーの戦いの再現を意図していたとするこの計画をめぐるリッターの解釈をその議論の基調としていたのである<sup>21</sup>。

だが冷戦終結後、このリッターの解釈に異議を唱えたのがテレンス・ツーバーである。ツーバーによれば、リッターの解釈こそ第二の「神話」と呼ぶべきものであった<sup>22</sup>。冷戦終結後、旧東ドイツ内に保管されていた史資料やロシア（ソ連）からドイツに返還された史資料のなかには、従来の歴史解釈に変更を迫る可能性のあるものが数多く発見されているが、ツーバーによれば、その一つがヴィルヘルム・ディークマン（Wilhelm Dieckmann）によって記された「シュリーフェン・プラン（Der Schlieffennplan）」という文書である<sup>23</sup>。この「ディークマン史料」を論拠としたツーバーの結論を一言でいえば、「シュリーフェン計画」の存在そのものが「神話」なのである<sup>24</sup>。1905年の「覚書」とは、軍備増強、とり

---

は、この計画が実際に実現可能なものであったという大きな嘘を作り上げたと批判されることになる。

<sup>21</sup> 例えば、Wallach, *Das Dogma der Vernichtungsschlacht*; L.C.F. Turner, "The Significance of the Schlieffenn Plan," in Kennedy, ed., *The War Plans of the Great Powers 1880-1914*, pp. 199-221; Martin Kitchen, *A Military History of Germany* (Bloomington and London: Indiana University Press, 1975); Arden Bucholz, *Moltke, Schlieffenn, and Prussian War Planning* (Oxford: Berg Publishers, 1991); Holger Herwig, *The First World War: Germany and Austria-Hungary 1914-1918* (London: Arnold, 1991) などの著作が挙げられる。リッターはドイツが大モルトケの戦争計画を採用すべきであったと確信していたようである。すなわち、東部戦線での攻勢と交渉による平和である。この点については、リッターとデルブリュックの見解には殆んど違いがみられない。

<sup>22</sup> ツーバーの所論については、Terence Zuber, *Inventing the Schlieffen Plan: German War Planning 1871-1914* (Oxford: Oxford University Press, 2002); *idem*, *German War Planning, 1891-1914: Sources and Interpretations* (Rochester, N. Y.: Boydell Press, 2004) を参照。また、いわゆる「ツーバー論争」については、Terence Zuber, "The Schlieffen Plan Reconsidered," *War in History*, vol. 6, no. 3 (1999); Terence M. Holmes, "The Reluctant March on Paris: A Reply to Terence Zuber's 'The Schlieffen Plan Reconsidered,'" *War in History*, vol. 8, no. 2 (2001); Terence Zuber, "Debate Terence Holmes Reinvents the Schlieffen Plan," *War in History*, vol. 8, no. 4 (2001); Terence M. Holmes, "The Real Thing: A Reply to Terence Zuber's 'Terence Holmes Reinvents the Schlieffen Plan,'" *War in History*, vol. 9, no. 1 (2002); Terence Zuber, "Debate Terence Holmes Reinvents the Schlieffen Plan - Again," *War in History*, vol. 10, no. 1 (2003); Terence M. Holmes, "Debate Asking Schlieffen: A Further Reply to Terence Zuber," *War in History*, vol. 10, no. 4 (2003); Terence Zuber, "Debate Schlieffen Plan Was an Orphan," *War in History*, vol. 11, no. 2 (2004) などを参照。

<sup>23</sup> Wilhelm Dieckmann, *Der Schlieffenplan*, Bundesarchiv-Militararchiv(BA-MA), W10/50220. ディークマンは経済史家であり、第一次世界大戦には将校として参戦、戦後、ドイツ公刊戦史の『軍備と戦争経済 (*Kriegsrüstung und Kriegswirtschaft*)』の執筆を担当した一人である。この史料は、1889年から1904年にいたる時期のシュリーフェンの戦略思想の発展を記した文書であり、未完成かつ未発表のものであるが、今日、ドイツ連邦公文書館・軍事公文書館(Bundesarchiv-Militararchiv)に保管されている。

<sup>24</sup> ツーバーによれば、「ディークマン史料」は次のような事実を明らかにしている。第一に、シュ

わけ兵員の増強を求めるシュリーフェンが、ドイツの徴兵制度の見直しなどを求めて作成したいわば政治文書にすぎず、この文書はシュリーフェンの戦略思想と何ら関係ない、とツーパーは主張する。ツーパーによれば、シュリーフェンの隠された意図は劇的なまでの新たな戦争計画を立案することではなく、彼が長年にわたって懸念していた陸軍の兵員不足問題を解決するための強力な論理を与えようとしたことである。確かに、実在しない「想像上の師団」を用いたシュリーフェンの文書は戦争計画と認められないとするツーパーの指摘には説得力がある<sup>25</sup>。

いうまでもなく、ツーパーの所論には大いに議論の余地がある。だが彼は、国家戦略レベルであれ軍事戦略レベルであれ、何が真に戦略を決定する要因なのかについて読者に鋭く問題を突き付けたのである。基本的にツーパーは、当時、保守的なドイツ軍人や陸軍省、そして帝国議会との軍備増強をめぐる対立に決着を付けたいと考えていた陸軍参謀総長シュリーフェンが、予算確保の目的で「シュリーフェン計画」なるものを作り上げた結論

---

リーフェンが二つの大きな関心事項を抱えていたことであり、その一つは戦争計画、もう一つが戦力態勢（陸軍の規模とその編制）であった事実である。そして、シュリーフェンはこの二つのなかで戦力態勢をより重要であると考えていた。第二に、シュリーフェンにとって戦争で重要なことは、決定的な勝利を得ることである。そして、その戦いがどの正面で行なわれるについては、その時代の環境が決定するはずであった。第三に、シュリーフェンの戦略思想が東部戦線での攻勢から西部戦線での攻勢に転換し、その結果の集大成が「シュリーフェン計画」であるとする見解はもはや否定されるべきである。第四に、シュリーフェンがある一つの完全な計画に自身を関与させたことは一度もない事実である。第五に、この「覚書」の内容、つまり西部戦線だけでの攻勢とは、シュリーフェンの戦略思想からの「孤立した逸脱」である。最後に、実在しない戦力を戦争計画に用いたことを説明可能な唯一の論理は、「シュリーフェン計画」が真の戦争計画ではなかったとするものである。詳しくは、Zuber, "The Schlieffen Plan Reconsidered," pp. 281, 284-285, 296 を参照。

<sup>25</sup> ツーパーは、具体的なプログラムのないものを「計画」と呼ぶことは許されないと主張する。戦争計画は形而上学ではない。戦争計画の「構想」は、それを遂行するために必要な兵力が存在しないため、戦争ではまったく意味をなさないのである。詳しくは、Zuber, "Debate Terence Holmes Reinvents the Schlieffen Plan," p. 469 を参照。

実は、既にリッターもこの点を指摘していた。すなわち、「結局、シュリーフェンの大きな目的とそのために使用可能な軍事力の奇妙な不均衡には驚かざるを得ない。大モルトケが描いていた積極的防御には現有の軍事力で十分であり、戦時における戦闘能力の増強のためには十分な時間が残されていた。しかしながら、シュリーフェンが計画した敵の迅速かつ完全な殲滅のためには、ドイツ軍はただ単に不十分であった。とりわけ、フランスを殲滅した後、東部戦線でロシアを撃滅する計画を考えると、ドイツの軍事力はまったく不十分であったと結論せざるを得ないのである。」詳しくは、リッター『シュリーフェン・プラン』79頁を参照。また、ホルガー・ハーウィックも視点はやや異なるとはいえ、『シュリーフェン計画』とは最初から空想であった。この計画は必要な軍隊が初めから存在せず、ドイツ帝国議会や陸軍省での様子から近い将来に実現不可能な軍事的認識でもって、ドイツを二正面戦争というギャンブルへと委ねたのである」と、この計画の実現可能性について厳しく批判している。詳しくは、Holger H. Herwig, "Strategic Uncertainties of a Nation-State: Prussia-Germany, 1871-1918" in Williamson Murray, MacGregor Knox, Alvin Bernstein, eds., *The Making of Strategy: Rulers, States, and War* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994) を参照。

しているのである<sup>26</sup>。その意味において「シュリーフェン計画」とは官僚的要請、とりわけ予算確保のための必要性の産物であり、必ずしも同時代の戦略環境に対応した明確な戦争計画の青写真ではなかったのである。戦略を決定する要因について詳しくは後述するが、その一つとして国内の政治的・社会的状況に着目した彼の論点は示唆に富むものである<sup>27</sup>。繰り返すが、シュリーフェン関連文書をめぐるリッターの解釈は、第一に、シュリーフェンが大モルトケの計画した東部戦線における攻勢を放棄し、西部戦線での攻勢を主張したというものであり、第二に、シュリーフェンが西部戦線での攻勢を完全なかたちの計画、すなわち、パリ周辺に対する右翼からの攻撃にまで発展させたというものであった。この解釈はその後、多くの歴史家から当然のように受け入れられてきたが、これこそ、完全に間違った歴史解釈であるとツーパーは主張するのである<sup>28</sup>。

以上が、今日までの「シュリーフェン計画」をめぐる研究史の概要であるが、以下、本稿ではひとまずツーパーの所論の正否を棚上げし、通説に従って「シュリーフェン計画」の特質を整理してみよう。

「シュリーフェン計画」の決定的要求事項は、「平凡な勝利」では意味がないことである。つまり、殲滅戦争が必要とされたのである。また、二正面での戦争という予想される戦略環境の下、ドイツが短期間に殲滅戦争を行なうためには、攻勢が不可欠であり、この攻勢により主導権を確保することが必要とされた。ドイツがフランス軍の攻勢を待っていれば、自らの望む迅速かつ決定的な勝利は期待できない。そこでシュリーフェンは、開戦当初からの攻勢を決意したのである。そして、それは事実上、フランスの要塞地帯を迂回することによって初めて成功の可能性が見出せるため、これは、ドイツがルクセンブルグやベルギー、必要であればオランダの中立侵犯も恐れてはならないことを意味した。また、パリへの方向転換という機動には大規模な兵力の展開に十分な空間が必要とされたが、その広

---

<sup>26</sup> ドイツ軍の規模の拡大に対しては、とりわけ陸軍省内に大量の「異分子」が軍隊内に紛れ込む可能性を危惧する声が大きかったのである。というのは、陸軍の増強は軍の「民主化」、さらには、ドイツ全体の社会的、政治的転換を不可避にすると考えられたからである。端的にいえば、軍事必要性を重視する参謀本部が陸軍力の数的増強を主張したのに対し、陸軍省はその質的改善を追求するに留まった。

<sup>27</sup> ツーパーが突き付けたこの問題をめぐっては今日でも活発な論争が続けられており、テレンス・ホームズやロバート・フォレイといった歴史家が積極的に論文を発表している。ホームズとフォレイは、「シュリーフェン計画」がツーパーの主張するようなシュリーフェンの戦略思想における逸脱などではなく、逆に、彼が陸軍参謀総長時代を通じて発展させた構想に根差したものであると反論している。詳しくは、Holmes, “The Reluctant March on Paris,”; Robert T. Foley, “Debate The Origins of the Schlieffen Plan,” *War in History*, vol. 10, no. 2 (2003) を参照。

<sup>28</sup> Zuber, “The Schlieffen Plan Reconsidered,” p. 304. 確かに、シュリーフェンは東部戦線での戦争計画を放棄することはなかった。これが「東方大開進 (der grosse Ostaufmarsch)」として知られる計画であり、ドイツがこの「東方大開進」の改訂作業を中止したのは、実に 1913 年のことである。

い空間が存在するのはベルギー及び北部フランスである。そして、ここでもオランダを巻き込む必要性が生じてくるのである。

「シュリーフェン計画」は、動員からクライマックスをなす戦闘にいたるまであらゆる過程が厳密かつ統一的に計画されていなければならない、行動予定及び決められた作戦目的を遵守することが求められた。というのは、この計画の成否は、ドイツ軍がベルギーを通過する前進速度と敵に対する奇襲の程度にかかっていたからである。明らかに「シュリーフェン計画」の根底には、時間の圧力という要因が流れている。だからこそ、後年、「シュリーフェン計画」は「マヌーバー・アプリアリ」として批判されることになるのである。

### 3 「シュリーフェン計画」の問題点

次に、「シュリーフェン計画」の問題点を整理してみよう。バジル・ヘンリー・リデルハートは「シュリーフェン計画」に次のような厳しい評価を下している。すなわち、「迅速な勝利を目的としたシュリーフェンの構想の根底には、殆んどすべて大胆不敵な離れ業に対する賭博師の確信以上のものはなかった。戦略概念としては、その正体は実行者にとっては『誘惑とまやかし』であり、当初から内在的な、最後に起こり得る致命的結果をとまなうものであった<sup>29</sup>。」また、リデルハートはこの計画に内在する技術的問題を、「ナポレオン時代には可能な戦争計画であったかも知れない。そして、第一次世界大戦からさらに時代が下れば、再び可能であったであろう。なぜなら、この時代には空軍力が防御側の兵力移動を麻痺させる一方で、機械化部隊の発展により、包囲運動の速度と範囲が大きく加速・拡大したからである<sup>30</sup>」と簡潔に纏めている。

リデルハートはリッターと同様、「シュリーフェン計画」そのものに批判的であったが、はたしてこうした批判にはどの程度の妥当性が認められるであろうか。そこで、以下、従来から指摘されている「シュリーフェン計画」への批判、シュリーフェン個人への批判、さらには、第一次世界大戦にいたるまでのドイツの戦争計画全般に対する批判を簡単に整理してみよう。なお、ここでも戦争計画としての「シュリーフェン計画」そのものが存在しなかったとするツーパーの見解は棚上げし、今日まで指摘されてきた批判を検討するものとする。

---

<sup>29</sup> リデルハート「英訳版『シュリーフェン・プラン』への序言」リッター『シュリーフェン・プラン』所収。

<sup>30</sup> リデルハート「英訳版『シュリーフェン・プラン』への序言」リッター『シュリーフェン・プラン』所収。

第一に、軍事戦略上の問題が挙げられる<sup>31</sup>。シュリーフェンは、西部戦線の右翼と左翼の兵力配置比率を7対1としたが、この兵力でもなお、フランス軍に対する大規模な包囲作戦を実施するには不十分であった。それを、後任の小モルトケがさらに3対1に修正したことは致命的であり、決定的地点に兵力を集中するという原則を誤ったとされる。またドイツは、東部戦線でのロシア軍の本格的な進攻開始を6週間後と見積もり、その間に西部戦線での勝利を想定していたが、現実には、ロシア軍の動員は極めて早く、計画の誤りは明確であったとされる。元来、「シュリーフェン計画」は日露戦争でのロシアの敗北を受けて立案されたもので、その後のロシア軍の再建や同国による鉄道網の整備を考慮していなかったと批判されるのである。

海軍の立場から考えても、「シュリーフェン計画」には問題があったとされる<sup>32</sup>。すなわち、「シュリーフェン計画」はイギリス欧州大陸派遣軍のフランス上陸にいかに対処するかについてまったく考慮しておらず、イギリスの海軍力がドイツに不利な影響を及ぼす前に戦争の決着を付けることができると過信していた。また、「シュリーフェン計画」が陸軍単独の短期決戦での勝利という思想に支えられていたことは明らかであり、対イギリス戦争は副次的であると軽視していたことは間違いないと批判されるのである。「シュリーフェン計画」がイギリスの海軍力や同国による海上封鎖の危険性を殆んど考慮していなかった事実は注目に値する。恐らく、シュリーフェンは迅速かつ完全な勝利を想定していたため、封鎖の危険性などが彼の方針に影響を及ぼすことは殆んどなかったであろう。だが同時に、20世紀初頭に新たな建艦時代に入っていたドイツ海軍の運用について、彼が西部戦線での支援任務、あるいはバルト海での使用を検討していなかった事実は重要である<sup>33</sup>。

また、シュリーフェンが戦争計画から「摩擦」の要素を排除しようとしたことは、まさにカール・フォン・クラウゼヴィッツへのアンチテーゼを提示したことになり、これこそメソディカルな戦争計画の典型であると批判されるのである。確かに、この計画のなかでシュリーフェンは、天候や部隊の疲労といった問題に殆んど関心を示していない<sup>34</sup>。

さらに問題とされるのは、この計画のなかでシュリーフェンが敵の能力を過小に評価し

<sup>31</sup> 以下の論点について詳しくは、義井博「第一次大戦とドイツ帝国の没落——歪められたシュリーフェン計画」神谷不二編『二十世紀の戦争——ヒトラーと二つの世界大戦』（『世界の戦争 九』）講談社、1985年、86頁を参照。

<sup>32</sup> 義井「第一次大戦とドイツ帝国の没落」神谷編『二十世紀の戦争』87頁。

<sup>33</sup> リッター『シュリーフェン・プラン』89頁。興味深いことに、こうした事態は第一次世界大戦時にも繰り返されることになる。すなわち、1917年2月、ドイツは戦争の早期決着を目的として無制限潜水艦作戦を発動したが、これがアメリカの参戦を決定的にしたのである。

<sup>34</sup> シュリーフェンが記した「フランス及びロシアに対する戦争」という覚書からも明らかのように、彼は天候や部隊の疲労に代表される「摩擦」の問題、そして、補給の問題に殆んど言及していない。この覚書について詳しくは、リッター『シュリーフェン・プラン』222-236頁を参照。

ていた事実である。より正確には、彼は自らの計画に合致するように敵の能力を算出しているのである。また、当然ながら「シュリーフェン計画」の成否は敵側の反応に多くを負っていたのであるが、この計画には敵の自由意志の存在が殆んど認められないのである。

第二に、兵站の問題が挙げられる。マーチン・ファン・クレフェルトはその著『補給戦——ナポレオンからパットン將軍まで』の序章のタイトルを「戦史家の怠慢」として、戦争史研究に対する歴史家の姿勢を厳しく批判している<sup>35</sup>。そして、同書の第四章では「壮大な計画と貧弱な輸送と」というタイトルの下、「シュリーフェン計画」の再評価が行われている。そこでは、鉄道を運用するドイツ軍部隊だけに留まらず、鉄道線そのものが敵の行動に対してまったく脆弱であった事実、また、「シュリーフェン計画」とは結局、兵站的思考ではなく軍事作戦中心の思考の産物であった事実が述べられている<sup>36</sup>。また、同章の結論としてクレフェルトは、「シュリーフェンの思想を詳細に検討する限り、彼はその計画を発展させる際、それほど兵站には注意していなかったようである。彼はドイツ軍が遭遇するであろう問題を十分に理解していたが、組織的な努力によってそれを解決しようとはしなかった。仮に努力していたとすれば、シュリーフェンはこの計画が実行不可能であると結論を下したであろう<sup>37</sup>」と厳しい評価を述べている。

第三に、政治と軍事の関係の問題が挙げられる<sup>38</sup>。シュリーフェンはその前任者であるヴァルデーゼーのような政治的野心がなく、軍事の領域の研究だけに徹した軍事技術者であったため、国際政治の変動に常に対応して戦争計画を考える配慮がなかった。したがって、「シュリーフェン計画」は軍事的視点だけから完全を期して組み立てられており、当初は、ベルギーだけでなくオランダの中立侵犯をもあえて行なうという大規模な構想であった、と指摘される<sup>39</sup>。「盲目的なプロフェッショナリズム」という批判である。また、第一

---

<sup>35</sup> クレフェルト著『補給戦』序章。クレフェルトによれば、例えばリデルハートの「シュリーフェン計画」に対する批判は、確かに兵站問題に集中しているものの、実のところ第一次世界大戦におけるドイツ軍の現実の食糧及び弾薬の消費量や必要量などは一切検討されておらず、また、補給制度及び組織についてもまったく言及されていないのである。ところが、このリデルハートの見解こそ、「シュリーフェン計画」が兵站的側面から実行不可能である論拠として、その後の多くの歴史書で引用され続けているのである。クレフェルトは、このような漠然とした議論ではなく、具体的な数字と計算の根拠に基いて「シュリーフェン計画」を再検討する必要があると主張している。詳しくは、同書、1～3頁を参照。なお、訳語は一部訂正した。以下も同様。

<sup>36</sup> クレフェルト『補給戦』106、108-110頁。

<sup>37</sup> クレフェルト『補給戦』131頁。

<sup>38</sup> 詳しくは、義井「第一次大戦とドイツ帝国の没落」神谷編『二十世紀の戦争』88頁。

<sup>39</sup> シュリーフェンが、ドイツが国外へ進攻するに際してその政治的影響を軽視した事実是否定できないが、実は、この批判は自国領土についても当てはまるのである。すなわち、仮に「シュリーフェン計画」が当初の予定通りに実施されていれば、西部国境地帯のドイツ領土、とりわけザール地方やライン河流域をフランスの占領に委ねる可能性が高かった。また東部戦線においては当初、東プロシア地域はロシア軍の攻撃に委ねられることになっていた。

次世界大戦前のいわゆる「英独建艦競争」が、イギリスが支配する既存の海洋秩序に対するドイツの挑戦であるとイギリスが認識していた事実を見落としていた点も、同大戦前のドイツ外交の失敗とされるのである<sup>40</sup>。

よく考えてみれば、日露戦争での敗北と国内の革命騒動によって殆んど存在感のなかった1905年当時のロシアと、1914年のロシア、さらには、ヨーロッパ大陸での次なる大規模戦争に参戦する可能性を有する諸国の関係やそれら諸国の能力には大きな変化が生じていたにもかかわらず、第一次世界大戦にいたるまで「シュリーフェン計画」は、その本質においてまったく不変であった。ここで注目すべき事実は、「シュリーフェン計画」が政治的柔軟性に欠け、代替案が欠如していた点である。どこで、そして、どのようなかたちで戦争が勃発しても、ドイツはフランスとベルギーに直ちに全面攻勢を行なうことになっていたのである（結局小モルトケは、オランダへの進攻は自制した）<sup>41</sup>。

1914年7月にヨーロッパの危機が訪れたとき、ドイツは外交的に何の準備もできていなかった。ドイツはただ一つの戦争計画を有するだけであり、その計画は硬直した確定の「時刻表」によって、ドイツ外交から一切の自由を奪ってしまったのである<sup>42</sup>。動員令、前進展開、そして宣戦布告といった厳しい時間の圧力こそ、オーストリアとセルビア間の調停努力が一切行なわれなかった要因である。その意味において、第一次世界大戦の勃発は、戦争計画に対する政治指導の頼りない従属のもっとも劇的な事例といえる。

ベルギーの中立侵犯に関してドイツとは対照的にイギリスは、ベルギー中立の保証人として振る舞い、いかなる場合にも武力で同国を連合側側に引き込むようなことはしない方針であった。イギリスにおいて軍事合理性は、無条件に政治的配慮の背後へと退いたのである<sup>43</sup>。

確かに、前任者のヴァルデーゼーがかなり独断的な軍人であったことを受けて、シュリーフェンの時代にはある種の反動が訪れたことは事実である。すなわち、シュリーフェンは陸軍参謀本部という自身の組織に閉じこもり、軍事以外の領域には意識的に目を閉ざし、

---

<sup>40</sup> 「英独建艦競争」については、Paul Kennedy, *The Rise and Fall of British Naval Mastery* (London: Allen Lane, 1976) を参照。

<sup>41</sup> 「シュリーフェン計画」に政治的柔軟性、あるいは代替案が欠如していた事実は、1914年の「7月危機」の際、バルカン半島におけるオーストリアとセルビアの対立を契機に、ロシアの動員に反応して当時は正式には敵国でなかったフランスに攻勢を行う、それも、ベルギー及びルクセンブルグという中立諸国を経由して攻撃を仕掛けた戦争そのものの経緯に顕著に伺われる。

<sup>42</sup> リッター『シュリーフェン・プラン』112頁。

<sup>43</sup> もちろん、そこにはイギリスの政治的計算があった。すなわち、イギリスはいかなる場合にも自国の都合を最優先することのないヨーロッパの諸条約の保護者として戦争に参戦できるという、大きな政治的利益を返上することはなかった。これが道義ではなく、もっとも冷徹な国家理性、自国の国益を考慮した結果であったことはいうまでもない。

彼に与えられた課題の解決だけに集中する「専門家」へと回帰したのである。シュリーフェンが意識的に参謀本部という閉ざされた世界だけで生きようとしていたとする評価は、恐らく正しいのであろう<sup>44</sup>。

また、通説に従えばシュリーフェンは、膨大な兵力を必要とする戦争計画を長年にわたって研究した結果、戦時にはとても現有の兵力では足りないことを認識していた一方で、陸軍の増強を求める政治的行為を控えていたとされる。そして、予算上は陸軍増強のために確保していた経費を、海軍の増強、とりわけ戦艦建設のために転用された時でさえ、一切の抗議を行わなかったとされるのである。

政治と軍事の関係をめぐる問題のなかで「シュリーフェン計画」に対する最大の疑問は、はたして軍事的勝利だけで戦争という政治問題を解決可能かというものであろう。仮に西部戦線で「シュリーフェン計画」が成功し、ドイツが軍事的勝利を収めたとして、一体、その後の展開はどのようになっていたのであろうか。たとえフランスが降伏しても、イギリスやロシアが休戦に応じなかったであろうことは容易に推測できる。ところがシュリーフェンは、戦場での勝利だけで敵に政治決着を強いることが可能であると考えていたようである。周知のように、シュリーフェンはカンネーの戦いを熱心に研究していたが、恐らく彼は、一つの単純な事実を見過ごしていたようである。すなわちそれは、ハンニバルによるこの戦いの勝利も、第二次ポエニ戦争全体の帰趨には殆んど影響を与え得なかったということである。さらにいえば、カンネーの戦いの再現を求めるシュリーフェンへの疑問は、このような大胆な機動が 19 世紀末期、あるいは 20 世紀初頭の条件下で可能であったかという点である。とりわけ当時の複雑な政治的・軍事的条件を考えたとき、カンネーの戦いが簡単に再現できるとは思えない<sup>45</sup>。

こうしてシュリーフェンの批判者は、彼が視野の狭い「軍事スコラ哲学者」であり、無謀にもより広い政治的影響を無視したと批判することになる。そしてこれが、シュリーフェンが「与えられた手段をもって全力を尽くし、彼の職業上の習慣と規則に従って『損な仕事』でも最善を尽くすならば、それで彼の任務が達成されたとする技術者的な考えをもっていただように思われる」という批判、すなわち、彼が「軍事テクノクラート」であった

---

<sup>44</sup> 興味深いことに、彼が 1905 年の「覚書」以前に記した「フランス及びロシアに対する戦争」という別の覚書には既に、あらゆる政治的考慮を排除し、ロシアの存在を考えず、戦争計画という側面だけに焦点をあてるという、後年のシュリーフェン批判に繋がる要素が伺える。詳しくは、リッター『シュリーフェン・プラン』222・236 頁を参照。

<sup>45</sup> これらの条件とは、例えば、仮想敵国の反応、その動員計画、鉄道及びその他（殆んどが馬力による）の輸送能力、そして、とりわけドイツ軍参謀本部が 100 万を超える軍隊の行動を管理・調整する能力を備えていたか否かという問題である。

という批判に繋がるのである<sup>46</sup>。そして、こうした事実をすべて総合すれば、第一次世界大戦前のドイツには陸軍及び海軍の個別の戦略はあっても国家戦略がなかったという批判に繋がるのである<sup>47</sup>。

第四に、疑いなくシュリーフェンは人道に対する責任意識が希薄であった。実際、対フランス戦争の緒戦において彼は、フランス及びベルギー国民への砲撃や報復の威嚇によってドイツ軍の進攻を急がせようと計画していたのである。

第五に、確かに「シュリーフェン計画」は時間的に窮屈な計画である。また、前述したようにいわゆる代替案が用意されていなかった事実もしばしば批判の対象とされる。こうした点については既に述べた軍事戦略上の問題及び政治と軍事の関係の問題とも関連するが、A・J・P・テイラーが優れた研究を残しているため、以下、テイラーの著作に依拠しながら改めてこの問題を整理してみよう。

テイラーによれば、「シュリーフェン計画」の核心であるフランスへの攻勢という方針は、ドイツに「たとえ戦争がバルカン諸国で始まっても、直ちにフランスを攻撃することを必要とさせた。つまり、二つの戦線における戦争という見積りがシュリーフェンの戦争計画を生んだとはいえ、この計画は、二つの戦線における戦争を回避困難にしてしまった。・・・(中略)・・・これは、『同盟』の存在が第一次世界大戦を生起させたという解釈を無効にするものである。同盟があろうとなかろうと、一旦『シュリーフェン計画』が採用されれば、ロシアとオーストリアの戦争は西ヨーロッパ諸国を巻き込まなければならなかったのである<sup>48</sup>。」

後年、第一次世界大戦においては動員は直ちに戦争を意味したといわれたが、理論上、多くの諸国の場合この指摘は正確でない。だが、例外的な国家が一つ存在し、それがドイツであった<sup>49</sup>。一般的に、動員は高度の威嚇であったが、やはり威嚇でしかなかった。と

<sup>46</sup> こうした批判について詳しくは、ローゼンバーグ「モルトケ、シュリーフェンと戦略的包囲の原則」パレット編『現代戦略思想の系譜』277頁を参照。当然ながら、シュリーフェンの批判者にとって彼の技術者的見解は、政治に対する配慮の欠如とされるのである。

<sup>47</sup> ホルガー・ハーウィックは『『専門的白痴』によって盲目となった『半神（ドイツ参謀本部の将校——石津注）』は、国家政策の政治的、経済的、そして心理的要素を含んだ『大戦略』の概念を、一度として考案しようとはしなかった」と、当時のドイツ軍人の姿勢を厳しく批判している。詳しくは、Herwig, "Strategic Uncertainties of a Nation: State: Prussia: Germany, 1871-1918" in Murray, Knox, Bernstein, eds., *The Making of Strategy* を参照。

<sup>48</sup> A. J. P. Taylor, *Struggle for Mastery in Europe 1848-1918* (Oxford: Oxford University Press, 1954), p. 340.

<sup>49</sup> A・J・P・テイラー著、古藤晃訳『戦争はなぜ起こるか』新評論、1982年 (A. J. P. Taylor, *How Wars Begin* [London: Hamish Hamilton, 1979])、136頁。なお、訳語は一部訂正した。以下も同様。A・J・P・テイラー著、倉田稔訳『目で見える戦史——第一次世界大戦』新評論、1980年 (A. J. P. Taylor, *The First World War: An Illustrated History* [London: Harmondsworth, 1979])、18頁。なお、訳語は一部訂正した。以下も同様。

ころがドイツは、動員と戦争を同一視したのである。その意味において、鉄道の「時刻表」によりヨーロッパに第一次世界大戦が強要されたのである<sup>50</sup>。

また、「シュリーフェン計画」が戦争開始後の数日間の計画を詳細に規定しているのではなく、戦争がドイツの完全な勝利で終結するまでのほぼすべての過程を包括的に一つの計画に凝縮していた事実は注目に値する。こうした計画は、例えば戦争計画の策定の際に大モルトケが備えていた柔軟性と比較するとき、はるかに硬直的かつ一面的であるといわざるを得ない<sup>51</sup>。

テイラーによれば、ドイツ軍の動員計画はすべて鉄道に依存していた。そして、鉄道は「時刻表」に基いて運行されるものである。すべての動員計画は数ヶ月あるいは何年も前から分刻みで策定されており、変更は不可能であった。一つの正面での計画修正は、他のあらゆる正面の動員計画を頓挫させてしまうことになる。当時、動員計画に少しでも変更を加えることは、次の「時刻表」が完成するまでには 24 時間どころか、少なくとも 6 ヶ月を要することを意味していたのである<sup>52</sup>。

第六に、はたしてある戦争計画が、その原型のまま実施されていれば成功したかという問題はしばしば議論されている。だが同時に、「シュリーフェン計画」の真の問題点は「攻勢主義への盲信 (cult of the offensive)」であり、これこそ、将来の戦略思想及びその研究の発展のために残されたシュリーフェンのもっとも重要な遺産であるとの見解も存在する<sup>53</sup>。

最後に、近年まで「シュリーフェン計画」に対する批判の中心的位置を占めていたリッターの所論を紹介することにより、「シュリーフェン計画」の問題点を改めて整理してみよう。リッターによれば、「シュリーフェン計画」は国家の論理が純粋に軍事的なものの考え方によって歪曲された典型的な事例である。すなわち、「純軍事計画が国家の最重要な政治

---

<sup>50</sup> これは、A. J. P. Taylor, *War by Time-Table: How the First World War Began* (London: Macdonald, 1969) の主題である。「シュリーフェン計画」の基本構想はベルギーの通過であったが、同様に重要な点は、動員と開戦が同時に行なわれることであった。そうしなければロシアが追い付き、結局、ドイツは二つの正面を抱えて戦うことを余儀なくされるからである。その意味において、ドイツが動員を決定した時が開戦であった。ドイツの動員計画は最初の 6 週間でフランスに進攻することを予定しており、ただ一つの変更も許されなかった。というのは、変更はすべての輸送計画が変わることを意味したからである。こうして、鉄道の「時刻表」が主な原因となって第一次世界大戦が勃発したのである。また、この点については、テイラー『戦争はなぜ起こるか』138 頁、142 頁も参照。

<sup>51</sup> リッター『シュリーフェン・プラン』58 頁。

<sup>52</sup> テイラー『戦争はなぜ起こるか』133-134 頁。

<sup>53</sup> ローゼンバーグ「モルトケ、シュリーフェンと戦略的包囲の原則」パレット編『現代戦略思想の系譜』282-283 頁。また、「攻勢主義への盲信」については、石津「戦略を考える三つの視点」を参照。

決定に対していかに強制的に圧力を加え、これを引きずっていったか、さらには、国家の政治運営が決定的瞬間にいかにか弾力性を失い、硬直化したかを示す典型である<sup>54</sup>。」そしてリッターは、「シュリーフェン計画」が勝利のための確実な方策であったか否かという問題よりも、むしろ、それが一切の政治協力をともなわない軍事技術的思考によって規定された戦争計画であった事実こそ批判されるべきであると結論する。それは、アルフレート・フォン・ティルピッツの海軍計画と同様、抽象的な「机上の計画」であった<sup>55</sup>。

確かに「シュリーフェン計画」は外交を拘束した。なぜなら、この計画の本質はロシアとフランスの動員完了までの時間の差にあるからである。そしてこれは、ドイツがロシア及びフランスの動員速度に遅れることが許されないことを意味する。このようにして、第一次世界大戦は外交交渉とは直接関係なく戦争計画が一人歩きし始めたといえる。また、「シュリーフェン計画」の実現可能性の問題として、速度と結束力のジレンマを挙げたのもリッターであった。すなわち、進攻には「速度」が求められる一方、戦場での勝利のためには部隊の「結束力」を維持する必要があるという問題であり、現実にはこの両者の均衡を維持することは不可能であった。

そして、なぜドイツの戦争計画が一つしか存在しなかったのかという問題を考えれば、それは結局、鉄道の「時刻表」が一種類しか組めなかったからという理由に行き着かざるを得ないのである。以上、軍事的必要性を全面に打ち出した計画、硬直した軍事の官僚化、そして、プロシア的な官僚絶対主義が「シュリーフェン計画」から色濃く伺えることは否定できない<sup>56</sup>。

#### 4 「シュリーフェン計画」論争をめぐる問題点

前節では「シュリーフェン計画」、シュリーフェン個人、そして、第一次世界大戦にいたるまでの期間のドイツの戦争計画全般に対する批判を整理したが、恐らく、こうした批判に対してシュリーフェンは、その通りであると冷淡に答えるであろう。しかしながら、こうした批判は「シュリーフェン計画」をめぐる問題点の本質ではないというのが筆者の基本的立場である。本稿は断じていわゆるシュリーフェン擁護論を展開するものではないが、

<sup>54</sup> リッター『シュリーフェン・プラン』99-170頁。

<sup>55</sup> ティルピッツの海軍計画に関しては、Kennedy, *The Rise and Fall of British Naval Mastery* を参照。

<sup>56</sup> こうした点について詳しくは、Holger H. Herwig, “The Dynamics of Necessity: German Military Policy during the First World War,” in Allan R. Millet and Williamson Murray eds., *Military Effectiveness Volume 1 The First World War* (Cambridge MA: Unwin Hyman, 1988); *idem*, “Strategic Uncertainties of a Nation-State: Prussia-Germany, 1871-1918” in Murray, Knox, Bernstein, eds., *The Making of Strategy* を参照。

以下、「シュリーフェン計画」論争をめぐる問題点を纏めることにより、この計画をめぐる真の問題を探ってみよう。

第一に、軍事合理性という観点からすれば、前項で触れた「マヌーバー・アプリアリ」や視野の狭い「軍事スコラ哲学者」といった批判は、総じてこの時期の時代状況をまったく無視した空虚な議論といわざるを得ない。

通説に従えば、シュリーフェンは決してドイツ全国民の動員によって計画に必要とされる兵力を準備しようとはしなかった。「世界政策」を推進するカイザーはティルピッツにドイツ海軍の拡張を実施させていたが、海軍予算を抑えてまで陸軍の予算を確保することはシュリーフェンのまったく関知するところではなかった。彼にとっては、与えられた兵力と限られた装備で戦争に勝利することが重要であった。当然ながら、シュリーフェンの方針として、ドイツ外交の失敗がもたらした同国の被包囲的な戦略環境や兵員上の劣勢といった不利な状況を克服するため、速戦即決の必要性がでてきたのである。そして、技術の発展による防御力の増大の結果、シュリーフェンにとって単純な正面攻撃や突破の試みは無意味なことになっていたのである。だからこそ彼は、大規模な軍隊、近代化された火力、複雑な要塞の出現などの条件下でいかにして短期決戦型の戦争に勝利すべきかという問題の解決を模索したのである。ここで本稿の文脈から重要なことは、次なる戦争は長期間に及ぶと予想されたからこそ、シュリーフェンが戦争を短期で終結させるための方法を求めたという事実である。仮に「シュリーフェン計画」に問題があったとすれば、それは、20世紀初頭までには戦争の結末はもはや兵力、鉄道、戦争計画などに基く計算だけでは予測し得なくなっていた事実を、ドイツ軍部が十分に認識していなかったことである。迅速な勝利が技術的に困難になりつつあったことにともない、戦争の帰趨は、国民の士気、社会の安定性、そして経済基盤といった要素に益々支配されるようになった。一般的に、このように次なる戦争が短期決戦になると楽観していた第一次世界大戦前の軍人を批判することは簡単である。しかしながら、近年の研究が示唆するところは、彼らはイヴァン・ブロッホやノーマン・エンジェルが描いた恐怖のシナリオを認識したうえで、これに対する解決策を見出すことこそ軍人の任務であると考えていた事実である。実際、彼らは戦線での膠着状態が出現する可能性を予測していただけでなく、ヨーロッパ経済とそれに支えられた政治秩序は長期にわたる消耗戦争を生き延びることができないという、常識的ともいえる懸念を抱いていたのである。とりわけシュリーフェンは、100万単位の軍隊の維持に膨大な費用が必要な時代においては、消耗戦争は想定できないとさえ述べている<sup>57</sup>。

---

<sup>57</sup> こうした点について詳しくは、石津朋之「1914年の『時代精神』」ブライアン・ボンダ著、川村康之訳、石津朋之解説論文『イギリスと第一次世界大戦——歴史論争をめぐる考察』芙蓉書房出版、2006年を参照。

「シュリーフェン計画」は西部戦線での迅速かつ決定的な勝利を目的としたため、傲慢とさえ批判されているが、近年の研究が示唆するところは、彼の前々任者であった大モルトケと同様、シュリーフェンは、ドイツが戦争の主導権を握り迅速な勝利を得ることに關してまったく自信をもてなかったようである<sup>58</sup>。

確かに、大胆、あるいは大胆すぎる計画という批判は正しいのであろうが、同時に、シュリーフェンがギャンブルを行っていた事実を想起すべきである。こうした批判に対して恐らくシュリーフェンは、戦争には危険が付きものであると冷淡に反論したであろう。なるほど「シュリーフェン計画」の成功は多くの幸運や偶然に依存していた。だが、はたして最初から勝利を保証する戦争計画など存在するであろうか。また、敵の自由意志は相手を受動的な立場に追い込むことにより拘束できるはずであった。だからこそ、「シュリーフェン計画」では速度が決定的な要素とされたのである。そして、「覚書」にも記されている右翼を強化せよとのシュリーフェンの指示は、そこに、この計画の根本的な危険が内在している事実を彼が明確に認識していたからである。また、現実の戦争は短期間で終結すると期待された。だからこそ、開戦当初に可能な限り多くの兵員を集結させる必要が唱えられたのである。戦争勃発後に予備役を動員し始めても意味がないのである<sup>59</sup>。

前述したように、テイラーは「シュリーフェン計画」を「時刻表」に拘束された戦争計画であると批判した。しかしながら、「時刻表」は正確である必要があった。だからこそ、「シュリーフェン計画」には「摩擦」の要素が入り込む余地があつてはならないのであつた。当然ながら、現地指揮官の自由裁量権などは論外であつた。「シュリーフェン計画」における自由裁量権の不在を指摘する論者は多いが、逆に彼らは「独断専行（Auftragstaktik）」の危険性を理解したうえで自由裁量権の必要性を指摘しているのだろうか。

しばしば見落とされている事実であるが、西部戦線への攻勢を正当化する論拠としてシュリーフェンを中心に主張されてきたものの一つに、経済的理由が挙げられる。すなわち、将来の戦争においては軍事物資やその他の消耗物資の増大にともない、とりわけ二正面戦争を実施するにあたってはザール地方の石炭とロートリンゲンの鉄鉱石が不可欠であり、この地域をフランスの占領に委ねるわけにはいかないというものである。この議論はかなりの説得力を備えているが、「シュリーフェン計画」に批判的な論者は、この問題にどう答えるのであろうか。

いうまでもなく、ドイツが「シュリーフェン計画」以外の戦争計画を準備していなかつ

<sup>58</sup> Zuber, "The Schlieffen Plan Reconsidered," pp. 262-305.

<sup>59</sup> こうした事実は、シュリーフェンが戦争の新たな形態をほぼ正確に理解していた証左であるともいえよう。

たことは問題である。だが同時に、シュリーフェンに留まらずドイツ軍部全般が戦争を遂行し、なおかつこれに勝利するためには、これ以外の方法がないと考えていたことも事実であり、実際、この予測は妥当であったように思われる。何れにせよ、「シュリーフェン計画」には極めて高い軍事合理性が備わっていたのである。

第二に、政治と軍事の関係というより高次の視点から、「シュリーフェン計画」論争をめぐる問題点を考えてみよう。ここで筆者の結論をあらかじめ述べれば、この計画の政治的影響について歴史家が真に論じるべき点は、仮に多くの困難にもかかわらず、新たなカンネーの戦いによってフランス軍や連合軍を迅速に殲滅できたとして、はたしてこの計画が、西部戦線の戦場での勝利が外交的解決によって補完され、同地のドイツ軍の大部分が直ちに東部戦線に移動することを許すような確固とした環境を構築する可能性を有していたか否かである。確かに、当時のフランス、ロシア、そしてイギリスの基本的な戦略目的を考えると、これに対する答えは限りなく否に近いのであるが、実はこの問いこそ、「シュリーフェン計画」をめぐる問題の本質なのである。そして、この問題は軍事の領域のものではなく、政治の問題なのである。仮にシュリーフェン個人やドイツ陸軍参謀本部がその職業的偏狭さという意味で欠点があったにせよ、これは副次的な問題にすぎない。また、しばしば指摘される「シュリーフェン計画」の背後に隠れた「最悪のケース」を想定するメンタリティも、軍人固有のものであり、シュリーフェン個人に限られたものではない。問題の本質は政治指導者の責任である。実際、彼らこそ国家の明確な方向性を提示することができず、戦争計画を外交政策に調和させることに失敗した点で批判されるべきなのである。実際、ビスマルクの失脚後、わずか 20 年前後でドイツは、かつてのヨーロッパ外交の中心、そして同盟網の中心から、自ら招いた孤立あるいは被包囲状態に置かれたのである。明らかに「シュリーフェン計画」には、政治の領域における失敗を補完するために計画及び実施されたという側面が伺える。「シュリーフェン計画」という極めて危険な結果をとまなう計画を遂行するに際して、ドイツは、敵を孤立化させ第三者の介入を阻止するという「ドイツ統一戦争」で示されたビスマルク流の外交の重要性を軽視した。疑いなくこれは政治の責任である。そしてこの事実こそ、第一次世界大戦前のドイツの戦争計画に対する本質的な批判へと繋がるものなのである。

第一次世界大戦後、多くのドイツの政治指導者が軍部の戦争計画をまったく知らなかったと弁明しているが、彼らが 1914 年以前に「シュリーフェン計画」の概要を知らなかったというのは明らかに事実と反する。ドイツの政治指導者は「シュリーフェン計画」を黙認していたというのが真実に近い<sup>60</sup>。また、戦争計画をまったく知らなかったと弁明した

---

<sup>60</sup> こうした政治指導の無力さについては、ジェームズ・ジョル著、池田清訳『第一次大戦の起原』

政治家が、当時、仮にその内容を熟知していたとしても、彼らがこれに介入したかについては極めて疑問である。はたして彼らは、軍部にその計画を変更するよう求めたであろうか。その答えは限りなく否に近いといわざるを得ない。本稿でも繰り返し言及したように、確かに「シュリーフェン計画」は、一旦動き始めるとその当初の予定を変更することは困難であるか、恐らく不可能であった。したがって、軍事上の決定は大きな政治的意味を有し、外交上の方針選択に厳しい制約を加えた。しかしながら、1914年以前の数年間、軍人が政治指導者に彼らの計画を強要したという根強い印象は完全に誤りである<sup>61</sup>。

ベルギーの中立侵犯問題についてシュリーフェンは、戦争の道義的側面は軍人には無関係であり、この問題の是非は宗教家の議論に任せればよいと答えるかも知れない。また、「フランス及びロシアに対する戦争」という覚書からも明らかなように、シュリーフェンはイギリスが介入する可能性を織り込み済みであった。だが彼は、イギリスが本格的に介入する前に戦争を終結させる可能性に賭けたのである。逆に長期間の戦いになれば、イギリスの発言力及び影響力は拡大するはずであった<sup>62</sup>。実際、シュリーフェンはイギリス欧州大陸派遣軍を殆んど意識していなかった。これは、彼がイギリス軍をアントワープで確実に撃滅できると考えていたからである。また、シュリーフェンが西部戦線での迅速かつ完全な勝利がイギリス海軍を無力化すると考えていたことは既述した。さらには、シュリーフェンがオーストリアに代表される同盟諸国との協調を重視しなかった理由は、それが信頼するに足る存在とは思えなかったからであり、実際、彼の懸念は妥当であったように思われる。

シュリーフェンの外交政策への配慮の欠如はしばしば批判の対象とされるが、政治問題にあえて係わり、その結果、辞職を余儀なくされた前任者ヴァルデーゼーの経験は、彼にとっては大きな警告となっていたに違いない<sup>63</sup>。シュリーフェンの認識では、平時における参謀総長の正当な任務は戦争計画の作成、戦闘ドクトリン及び戦闘能力の向上、そして、

---

みすず書房、1987年 (James Joll, *The Origins of the First World War* [London: Longman, 1984]) に詳しい。

<sup>61</sup> ローゼンバーク「モルトケ、シュリーフェンと戦略的包囲の原則」パレット編『現代戦略思想の系譜』280-281頁。

<sup>62</sup> 第一次世界大戦におけるアメリカの介入問題については既述したが、実は、短期間で戦争に勝利しなければならないというこの絶対条件こそ、ドイツが抱えた永遠の戦略課題であった。第二次世界大戦時の「電撃戦」構想と同様、やはりこれはドイツが抱えた戦略的ジレンマに帰すべきであり(詳しくは、カール・ハインツ・フリーザー著、大木毅、安藤公一訳『電撃戦という幻』(全二巻)中央公論新社〈Karl-Heinz Frieser, *Blitzkrieg-Legende. Der Westfeldzug 1940* [München, 1995]、2003年を参照)、シュリーフェン個人、あるいは「シュリーフェン計画」に特有の問題ではないのである。

<sup>63</sup> ヴァルデーゼーは、カイザーに対してドイツ海軍の拡張が危険であり、イギリスと敵対するだけに終るであろうと忠告したのである。

カイザーの求めに応じて助言を行うことに限定されていたのである<sup>64</sup>。かつてリッターは、「シュリーフェンは、政治的全体状況から考えて戦争が望ましいものとするだけの価値を有するか否かの判断を下すことなく、常に厳格なまでに自身の役割の限度内に留まったのである<sup>65</sup>」と批判したが、シュリーフェンは、これこそが参謀本部及び参謀総長の正当な任務であると答えるであろう。繰り返すが、陸軍参謀総長の主たる任務は年次戦争計画の立案である。その意味においてシュリーフェンは、自らの職務に忠実であったのである。そうしてみると、参謀総長には軍事的な専門領域以外でも幅広い見識が要求されるとの批判、そして、とりわけ当時のドイツ国内での政府組織の関係が混乱していた事実に注目し、制度的な欠陥が明らかな場合にはそれをシュリーフェン個人の能力で補完すべきであったとの批判は、あまりにも安易すぎるものといわざると得ない<sup>66</sup>。シュリーフェンの政治感覚の欠如を批判する論者は、それでは彼が政治の領域にまで踏み込んで発言すべきであったのかという、政軍関係をめぐる根源的な問いに答える必要がある。第一次世界大戦の原因、とりわけドイツ国内での政治的混乱についてハンス・ウルリヒ・ヴェーラーは、その著『ドイツ帝国 1871～1918年』のなかで「前方への逃避」や「やけくその危機管理」といった表現を用いて示唆に富む説明を試みているが、「シュリーフェン計画」をめぐる問題点を考えるうえではこの政治指導者の責任こそ、改めて問われるべきものである<sup>67</sup>。

第三に、戦争計画の立案に際してシュリーフェンにとっては、大モルトケのいわゆる「臨機応変の戦略」こそが問題なのであった。彼は、参謀総長の任務が細部にわたって指示することではなく、大きな枠組みの提示に留まるべきであるとした大モルトケの方針に批判的であった。少なくとも、「シュリーフェン計画」という高度な統制を必要とする戦争計画を実施するためには、臨機応変の許容は致命的な結果をもたらす可能性があったのである。

第四に、クラウゼヴィッツや大モルトケが「摩擦」という不可測な要素の重要性と敵の自由意志の存在を認めていたのに対して、シュリーフェンは、敵を自らの構想に実質的に従属させることが必要であると唱えた。彼は、攻勢を用いることによって主導権を確保することを計画し、軍勢力をその翼側に集中することによって敵を混乱させ、敵から実行可

---

<sup>64</sup> ローゼンバーク「モルトケ、シュリーフェンと戦略的包囲の原則」パレット編『現代戦略思想の系譜』278頁。

<sup>65</sup> リッター『シュリーフェン・プラン』137頁。

<sup>66</sup> 考察の対象は少し異なるが、第一次世界大戦後のいわゆる戦間期のヨーロッパ国際政治に注目したヒンズレーは、こうした歴史家の安易な批判を厳しく戒めている。詳しくは、F. H. Hinsley, *Power and the Pursuit of Peace: Theory and Practice in the History of Relations between States* (Cambridge: Cambridge University Press, 1963), pp. 309-34 を参照。

<sup>67</sup> ハンス・ウルリヒ・ヴェーラー著、大野英二、肥前榮一共訳『ドイツ帝国 1871～1918年』未来社、1983年 (Hans-Ulrich Wehler, *Das Deutsche Kaiserreich 1871-1918* [Gottingen, 1973])、278～325頁。

能な選択肢を奪い取ることを意図したのである。シュリーフェンは、予期せぬ事態が発生する可能性については織り込み済みであったが、彼が追求した統制された戦争計画、すなわち「マヌーバー・アプリアリ」は、事前の綿密な計画と中央集権化された指揮によってこれをできる限り排除することを目的としたものであった。また、シュリーフェンは近代軍隊があまりにも大規模になりすぎて一人の指揮官では統制不能になりつつあることを認める一方で、この問題を技術で解決しようと考えていたのである。彼は1909年、「現代のアレクサンドロス」は、遠く離れた司令部から指揮するため「電信、無線、電話・・・(中略)・・・自動車、オートバイ」などに代表される新たな通信手段を最大限に活用するよう主張している<sup>68</sup>。

最後に、ここまで検討したように「シュリーフェン計画」については今日まで多くの論争が続けられており、そのなかでもドイツにとってこの計画が破滅への青写真であったのか、それとも成功の可能性が高い計画であったにもかかわらず、第一次世界大戦直前の小モルトケによる計画修正によって、さらには1914年夏、緒戦における指揮官としての彼の失敗によって崩壊したのかという問題をめぐっては、多くの著作が出版されている。だがその一方で、こうした明らかに否定的な評価も、次の事実によってある程度は相対化される必要がある。すなわち、いかなる欠陥を抱えていたにせよ、実際に遂行されたドイツの戦争計画は西部戦線ではもう少しで成功するところまで行き、東部戦線でドイツは、ロシア軍に圧倒的な勝利を収めたことである<sup>69</sup>。だがそれ以上に重要なことは、当時のドイツが抱えていた政軍関係の制度上の問題及びその実相を踏まえたいうで「シュリーフェン計画」を再検討することなのである。

## 5 何が戦略を決定するのか —— 「ツーパー論争」と戦略を考える三つの視点

マイケル・ハワードは、第一次世界大戦にいたるまでの期間、ヨーロッパ主要諸国の軍人が次なる戦争の様相をどのように捉えていたかについての的確に描写している<sup>70</sup>。それによれば、同大戦前の軍人の認識として次の四つを挙げることができる。第一に、戦争は不

<sup>68</sup> ローゼンバーク「モルトケ、シュリーフェンと戦略的包囲の原則」パレット編『現代戦略思想の系譜』279-280頁。

<sup>69</sup> ドイツ軍が成功の目前にまで達していた一方、それが直ちに当時のドイツ側の兵站上及び兵員上の劣勢、あるいは決して降伏しようしないフランスの断固とした抵抗などを克服するには十分でなかったことは事実である。さらには、仮に当初の攻勢が成功していたにせよ、フランスはいうまでもなく、イギリスやロシアが休戦に応じることはあり得なかったであろう。

<sup>70</sup> Michael Howard, "Men Against Fire: Expectations of War in 1914," in Miller, Lynn-Jones, Evera, eds., *Military Strategy and the Origins of the First World War*. また、Hew Strachan, *European Armies and the Conduct of War* (London: Unwin Hyman, 1988), pp. 128-129 も参照。

可避であるとの認識である<sup>71</sup>。第二の前提は、戦争が短期間で終結するであろうというものである。戦争は凄惨なものになるとの予測はなされたが、少なくとも相対的には短期間で終ると考えられた<sup>72</sup>。政治指導者であれ軍人であれ、彼らは当時のヨーロッパ主要諸国が経済的相互依存関係にあることを知っていたため、通商関係を中断させることになる戦争は、短期間で終結させる必要があると考えたのである。もちろん、戦争による国内の経済的負担、そして国民生活への影響は計り知れないと考えられた。だからこそ、戦争は国内の安定を損なうことのないよう、絶対に短期間で終わらせなければならなかったのである。とりわけドイツにとって、これは普仏戦争の後半での、あたかもゲリラ戦の様相を呈した苦い経験に裏付けられたものであった<sup>73</sup>。そして、ここで短期間の戦争が意味するところは、動員可能な兵力をできる限り早期かつ迅速に集中して、敵に先制攻撃をかける戦争に他ならなかった。「シュリーフェン計画」に限らず、フランスの「第一七号計画」やロシアの「第一九号計画」もその結果にすぎないのである。

ハワードが指摘する第三の前提は、勝利の可能性をもっとも有するとされる方法が、直ちに攻勢にでることと考えられた事実である。攻勢こそ、敵の動員を阻止あるいは予防するもっとも可能性の高い方法と考えられ、同時に、自国に有利な条件下で戦闘が行なえる方法と期待されたのである。フランスは、普仏戦争で防勢を用いたため敗北を喫したと考えられた<sup>74</sup>。実際、予防戦争や先制攻撃といった表現は、当時は極めて一般的に用いられていた。そしてこのような危険な傾向は、とりわけフランス及びロシアとの二正面戦争を

---

<sup>71</sup> 例えば 1912 年 12 月、小モルトケはいわゆる「戦争会議」の席で戦争が不可避であり、それが早ければ早いほどドイツにとって都合が良い旨の発言をしている。またヴォルフガング・モムゼンは、これを、すべてのヨーロッパ諸国を巻き込んだ戦争は避けられないという「トポス」の存在と表現している。詳しくは、Wolfgang Mommsen, “The Topos of Inevitable War in Germany in the Decade before 1914,” in Volker R. Berghahn and Mark Kitchen, eds., *Germany in the Age of Total War* (Bloomington and London: Indiana University Press, 1981) を参照。

<sup>72</sup> 1870～71 年にヨーロッパ大陸で戦われた最後の大規模戦争である普仏戦争の経験から実際の戦闘が 6 ヶ月以上続くとは考えられないとされたのである。1909 年の有名な論考「今日の戦争」のなかでシュリーフェンが述べたように、100 万規模の軍隊を維持するためには膨大な費用が必要となり、長期間に及ぶ消耗戦争は想定できない事態であった。そして、このように迅速に戦争の決着がもたらされると考えたからこそ、開戦当初にすべての兵力が行動可能なことが重要となってくるのである。緒戦の戦闘に敗北した後、予備役部隊を動員しても意味がなかった。ここに第一次世界大戦における動員の意味が理解できよう。加えて、長期間の物資の戦いを維持するための産業基盤を整備することなど、予想される短期間の戦争においては役に立たないと考えられていたのである。詳しくは、Michael Howard, “Europe on the Eve of the First World War,” in Michael Howard, *The Lessons of History* (Oxford: Oxford University Press, 1991), p. 121 を参照。

<sup>73</sup> 詳しくは、Robert T. Foley, “From *Völkskrieg* to *Vernichtungskrieg*: German Concepts of Warfare, 1871-1935,” in Anja V. Hartmann, Beatrice Heuser, eds., *War, Peace and World Orders in European History* (London: Routledge, 2001) を参照。

<sup>74</sup> Howard, “Europe on the Eve of the First World War,” p. 122.

恐れるドイツにもっともみられたのである<sup>75</sup>。ドイツからすれば、ロシア軍の兵力が最大限に動員される前にフランスの抵抗力を完全に破壊する必要があった<sup>76</sup>。

第四の前提は、将来の戦争において軍隊は膨大な犠牲を甘受する必要があるであろうというものである。新たな兵器がもたらした影響については十分に研究されており、これらの兵器から生じるであろう犠牲について幻想を抱く軍人など存在しなかった<sup>77</sup>。だが社会的にも、当時の一般国民が教え込まれた精神は国家のために戦うことだけではなく、国家のために死ぬことであった。犠牲の精神、とりわけ「崇高な犠牲」の精神は、交戦諸国の戦争初期の文学やジャーナリズムを支配していた。それだからこそ、後の世代が驚愕する死傷者のリストも、同時代の人々にとっては軍の無能さの兆候ではなく、国民的決意の尺度、大国としての相応しさの尺度と捉えられたのである。1914年の国民的熱狂のなかで、膨大な犠牲ですら甘受しようとする一般的傾向がみられたことは驚くべきことではあるが、それが当時の「時代精神」なのである<sup>78</sup>。

最後に、「シュリーフェン計画」の真の問題点を考察する際、いかなる側面に着目する必要があるのであろうか<sup>79</sup>。いうまでもなく、その第一は、その時代の「戦略環境」である。それを踏まえたうえで「シュリーフェン計画」の構造上の問題を再検討する必要がある。すなわち、1905年の「覚書」でシュリーフェンによってその枠組みが示されたドイツの戦争計画が、現実に西部戦線における完全な勝利の可能性を有していたか否か、そして、「シュリーフェン計画」遂行にともなう政治的・軍事的不利益を甘受してまで、成功の大きな可能性を有していたか否かという問題である。この問いに対するリッターの答えは明らか

<sup>75</sup> ストローンは、防御だけでは戦争の決着を付けることが不可能であるという当時のドイツが抱えた戦略的ジレンマを見事に描写している。詳しくは、Strachan, *European Armies and the Conduct of War*; pp. 130-149 を参照。

<sup>76</sup> Howard, "Europe on the Eve of the First World War," p. 122.

<sup>77</sup> すなわち、機関銃（機関銃は当初、機動的な攻勢作戦に理想的な兵器と考えられていた）はいうまでもなく、連発式小銃や散開した敵歩兵部隊に榴散弾を発射する速射砲の威力、そして塹壕に高性能爆弾を打ち込むことによって生じるであろう犠牲の大きさなどを、当時の軍人は十分に認識していたのである。

<sup>78</sup> 詳しくは、モードリス・エクスタインズ著、金利光訳『春の祭典——第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』TBSブリタニカ、1991年 (Modris Eksteins, *Rites of Spring: The Great War and the Birth of the Modern Age* [London: Bantam Press, 1989]) を参照。また、ヨーロッパにおける社会ダーウィニズムの受容は、恐ろしい矛盾をさらに深める結果を招いた。すなわち、ある国家の適者生存は、その国民がどれだけ死を受け入れる用意があるかにかかっていたのである。犠牲を回避することは、将軍の任務とは考えられていなかった。逆に犠牲を喜んで受け入れることこそ、指揮官や一般兵士に共通した認識であった。詳しくは、Howard, "Europe on the Eve of the First World War," p. 123 を参照。

<sup>79</sup> 戦略とは何か、そして何が戦略を決定する要因なのかという問題については、石津「戦略を考える三つの視点」、Michael Howard, "Grand Strategy in the Twentieth Century," *Defence Studies*, Vol. 1, No. 1 (Spring 2001); Williamson Murray, Mark Grimsley, "Introduction: On Strategy," in Murray, Knox, Bernstein, eds., *The Making of Strategy* を参照。

に否であったが、はたしてそれは真実であろうか。西部戦線での勝利を政治的に利用し、講和を成立させ、その兵力を東部戦線に移送することはできたであろうか。そして、第一次世界大戦をドイツに有利な条件で終結させることは可能であったであろうか。こうした問題を、当時の「戦略環境」という枠組みの下で改めて検討することが求められているのである。

第二に、ドイツ国内の社会的・政治的制約要因を探る必要がある。ツーパーの議論で示された「国内要因」においては、国家のなかの国家としての軍の特殊な地位、軍事組織と政治組織の永続的な対立、陸軍省、軍事内局、海軍本部、軍令部、そして参謀本部といったそれぞれの軍事組織の権限の分裂状態、法的には最高戦争指導者であるカイザー自身でさえ客観的な責任能力を欠いていた事実など、ドイツ国内の社会的・政治的制約要因が第一次世界大戦前のドイツの戦争計画において、さらには、同大戦での現実の戦争指導においていかなる影響を及ぼしたかという問題である<sup>80</sup>。当時のドイツが抱えた大きな国内問題が、構造上、カイザーの親政を抑止する装置がなかったことであるとすれば、憲法上の問題などを踏まえながら「シュリーフェン計画」の問題点を考える必要がある。また、第二次世界大戦前のアメリカの対日戦争計画である「オレンジ計画」と同様、「シュリーフェン計画」は官僚的要請、とりわけ予算確保のための必要性の産物であり、必ずしも明確な戦争計画の青写真ではなかったというツーパーの見解は、さらなる検討が必要とされる<sup>81</sup>。

そして第三が、先にも触れた「シュリーフェン計画」と「時代精神」の相互関係である<sup>82</sup>。例えば、当時の「時代精神」とされる戦争の不可避性に対する宿命的ともいえる信仰、強烈な国民的威信、そして、ヨーロッパ諸国の覇権への欲望を「シュリーフェン計画」や第一次世界大戦全般との関連でいかに評価するかが問われているのである。

## おわりに

本稿での結論を繰り返せば、確かに「シュリーフェン計画」という軍事上の方針は、それ自体が大きな政治的意味を有し、外交上の方針選択に厳しい制約を加えた。そして1914年夏、ドイツには二正面戦争か政治的敗北かという二つの選択肢しか残されていなかったのである。だが、その究極的責任は政治指導者にある。1914年のドイツの悲劇は、やはり

---

<sup>80</sup> こうした点については、アルフレート・ファークツ著、望田幸男訳『ミリタリズムの歴史——文民と軍人』福村出版、1994年(Alfred Vagts, *A History of Militarism: Civilian and Military* [London: Macmillan, 1959])、193～240頁に詳しい。

<sup>81</sup> 「オレンジ計画」については、フランシス・G・ホフマン「米国の戦略計画策定(1919～1939年)——無知から臨機応変へ」石津、マーレー共編著『日米戦略思想史』を参照。

<sup>82</sup> 詳しくは、石津「1914年の『時代精神』」ボンド著『イギリスと第一次世界大戦』を参照。

## 石津 「シュリーフェン計画」論争をめぐる問題点

政治家の弱さに起因しているといわざるを得ないのである。そうであれば、憲法を含めてプロシア及びドイツ国内の社会・政治制度そのものに悲劇の原因を求めることも許されるはずである。先にも触れたように、このようなドイツの国内要因を論拠としてヴェーラーは、第一次世界大戦前の同国を「前方への逃避」、さらには「やけくその危機管理」と表現したのである。

最後に、シュリーフェンという一人のドイツ軍人の名前が、戦争の勝利との関連ではなく、その真偽は別として壮大かつ天才的な戦争計画を立案した人物として今日まで伝えられている事実は、真の意味での戦争の勝利とは何かを考えるうえで大いなる皮肉といわざるを得ない。

**(防衛研究所企画室研究調整官兼戦史部主任研究官)**